

語感と時代

医事評論家

行 天 良 雄

「医療」といってもいまや誰もその言葉に疑問など持たないくらいに定着してしまっている。そこで古すぎるこの言葉をめぐる思い出を語らせていただく。

1945年8月15日の敗戦は、当時19歳だった私に大きな衝撃を与えた。負けた悲しみ、新型爆弾とよばれた原爆、さらには連日連夜続いていた焼土化作戦からの開放より何より、一夜にして価値観を転換させ平然としている政治・社会・教育……etc。その変わり身のすごさに今でも人間不信の原点は消えない。お金どころか、食べる物を得るため10日あまり後に厚木経由で進駐してきたアメリカ先遣部隊に全くのアルバイトで採用された。「K」レーションと云われる兵隊用の弁当が1日3個だった。しかしこの箱の中にあるガム、チョコレート、コンビーフ、チーズは4年以上も前に忘れ去ってしまった物との出会いだった。

しかし、それ以上に運命的だったのは占領軍の情報将校との出会いだった。「征服者と奴隷」を覚悟していた私にとって、彼らCIEのスーパーエリートの気さくな対応は人生観を根底から変えてくれた。第8軍の病院での小使いや、GHQでのボーイなど、短い間に日本占領と、その後はおろか今日にまでつながる日本の政治社会組織を決めた人々の警咳に接し得たのも、すべて上司ともいえる人々の配慮だった。しかし彼らの大半は1年もたたないうちに次々と本国に帰国させられてしまい、ニューディール派を嫌う参謀本部のもと、やがて50年の朝鮮動乱へ向けての東西対立が被占領国の立場を変えてしまった。占領軍は進駐軍となり、敗戦は終戦に変わった。

私は、これもまた不思議な糸で、今のNHK、そのころの放送局に出入りして、キャンペーン放送の台本などの訳を手伝ったり

していた。いつまでも入り口にMPが立っていたし、放送会館の半分近くはGHQのスタッフが仕事をしており、電波メディアへの統制はきわめて徹底していた。

キャンペーンの主軸は戦争責任をめぐるドラマやドキュメンタリーだったが、公衆衛生面とくに結核と精神病への関心は高かった。その中ではっきり覚えているのは、「メディスン」という言葉をめぐっての扱いだった。すべて医学と訳せといわれていたが、日本側スタッフは日本人の感覚では、医学というのは科学の一つであって、ある意味では医学者の独壇分野である。そしてその意味は「メディカルサイエンス」であって、一般国民にとってもっと普通の言葉を何とかして探し出したいと百論百出した。ありきたりの「健康」をはじめいろいろあったが、最後に残ったのは「医療」だった。ところが長い結核の記憶、さらに療養所のイメージということで「リョウ」という語感への抵抗がつよく、ペンディングが繰り返された。しかし、いくら並べたててもこれ以外の言葉はなく、別に決めるということでもなく医療はメディスンの日本語として定着した。

61年、「健康保険」と通称されていたものがいつか「医療保険」となり、81年、NHK特集は「日本の医療」という言葉を定着させ、一般の人々にとって自らの生死、そして良い生活につながる心と体の安定などという総合性こそが重要であることを認識させた。もちろん「医療」は、いわゆるメディカルサイエンスをベースの一つとして持たねばならないが、そのめざすところはやはり多少の乖離を意識せざるを得ない。時代が変わり急性対応から長期対応にシフトし、俗にいわれた「死の怖れ」を持つ病気の時代から死を前提にした長命化への転換は急激かつ決定的である。何よりもあんなに嫌われた語感だった「リョウ」という言葉は、今や颯爽と介護保険という大きな車に乗ってその姿を誇示し出している。

黙っていても長生きできる、50年たった日本は、メディカルサイエンスに何を求めていくのだろうか。学問としてのおもしろさを遺伝子やロボット工学ですすめても、人は何によって生きるかという大命題を目前にして、健康につながる人生観の転換が始まっている。